



移動する「表御錠口」おもておじょうぐち

19世紀前半になると「表御錠口」は、パネル1の役割に加え親戚大名や藩主の来訪者を奥向表方に迎える際の出入口として、さらには当主の江戸城登城や年中儀礼の際の正式な出入口としても定着していきました。

「表御錠口」には、大奥の錠口とは違って番人の詰所は置かれなかったようですが、側向頭取の執務日記「少傅日録抄」では確実に認識されており、儀式の目的や規模、屋敷の状況によって移動することもありました。

たとえば、天保9年（1838）に慶永が常盤橋上屋敷に引っ越した際の家中お目見えの儀式では、11歳の慶永に配慮したためか、仮設の「表御座の間」等が設けられ、全体に大きく移動しない設営になっていたようです。

側向頭取の熊谷小兵衛の息子熊之助は出仕前でしたので、大廊下を仕切って、やはり仮設の「表御錠口」外とした場所で、錠口の内に入れない表小姓とともにお目見えしました。



★ この時慶永は、側用人や広敷御用達、医師らに「初テ」と声をかけましたが、熊之助らに対しては通りかかりのお目見えで言葉かけはありませんでした。